

令和2年度
簡易版ティーチング・ポートフォリオ

2021年5月21日

教授 棟方 秀和

1. 教育の責任

私は、主に栄養士養成課程における「人体の構造と機能」、「食品と衛生」、「栄養と健康」の分野の授業科目を担当している。栄養指導や献立の基準の根拠となる知識や理論を講義と実習を通して学生に理解させようとしている。具体的な担当科目は、「生化学(2年前期)」、「生化学実験(2年後期)」、「食品学Ⅰ(1年前期)」、「基礎栄養学(1年前期)」である。栄養士養成課程の科目以外では、「スタディスキルズⅠ(1年前期)・スタディスキルズⅡ(1年後期)」と「特別研究Ⅱ(2年通年)」を担当し、研究テーマの設定から研究の進め方・まとめ方および発表の仕方などを指導している。

平成26年度からは学科長として、学科FD活動を企画・運営し、教員の教育力向上に努めている。学科の3つの方針に対する学科教員の認識度を深め、特に栄養士養成課程では担当教員どうして教育内容を共有し、効果的に教育活動を実践することによって、教育の質の向上を目指している。

2. 教育の理念と目的

学科で掲げている「根拠に基づきながらも対象者によりそった栄養の指導を給食の提供ができる栄養士」を育てようとしている。基礎的な分野の科目を担当しているので、学生には科学的な理論や知識をしっかり理解し、それらに基づいて全身の状態を説明できるようになることを求めている。学生が、さまざまな基準値がどのように設定されているのかを理解したうえで、献立の作成や食事のアドバイスを実践できるようにすることを願っている。学生が献立や指導媒体などを作成した際には、そのような献立や指導媒体が完成するまでの過程(ストーリー)やコンセプトなどを説明できることが大切であるということを認識してほしい。そして、説明できたことに喜びを感じ知的な好奇心を高い状態で保ち、生涯にわたり学び続けるようになってくれることを期待している。担当しているのは、学生が苦手な分野なので、学生にはどのような困難なことに対しても、「情熱」をもって「粘り強く」取り組んで最後までやり抜けば、必ず成果が得られるという経験をしてほしいとも考えている。

3. 教育の方法

なるべく身近なものを例に挙げて、全身の状態と細胞レベルや物質レベルの反応とを結びつけて説明することを心がけている。ときにはスポーツなどに例えて、生体内のミクロのレベルで起こっていることを、少しでも学生がイメージしやすいように努力している。毎時間、授業の終わりには振り返りシートを記述してもらい、学生の理解度や授業に対する興味などを確認している。振り返りシートへは可能な限りコメントを返し、振り返りシートをしっかりと読んでいることが学生に伝わるようにしている。毎時間、授業や教科書に記述されている内容の理解度を確認するために、一つのテーマに関して自分の言葉で記述させる課題を提出させている。課題の返却も次の授業に行い、前の時間の復習を兼ねて、課題についてコメントし、課題を作成する能力の向上にも努めている。読解力の向上をめざして、授業に関係のあるテーマの新書を読ませる課題にも取り組んでいる。昨年度から授業全体の内容を関連づけて考えさせる課題も取り入れ、生化学では、授業で学んだ代謝経路をA3判用紙1枚に「代謝マップ」としてまとめさせて、学生の理解度を深めようとしている。今年度からは、できるだけPowerPointで作成することを推奨し、学生のパソコンスキルの向上に対しても力を入れている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大による遠隔授業への対応をさまざまと試みている。

4. 評価と成果

担当している科目は苦手としている学生が多いので、授業評価アンケートでは学生の理解度に関する自己評価は学科平均より低い。話し方や熱意、授業準備の評価は理解度に比べてかなり高く、授業の方法に関しては学生からある程度評価されていると認識している。学生の理解度の自己評価が低いのは、やや高めに授業のレベルを設定しているからでもある。それは、100の力を安定して発揮するためには、最大で150くらいの力をもっていなければならないと考えているからである。学生は他の養成施設のことをほとんど知らないと思うので、理解度についてはそれほど低くはないということを学生に認識させる必要がある。理解度が低くないということは、栄養士実力認定試験の結果で、学内平均が全国の短大平均を上回っていることから判断できるだろう。しかし、他の領域と比べると実力認定試験の正解率は低く、絶対的な視点では理解できているとは言えない。授業である程度までは知識(学習成果)を獲得させているが、社会から求められる専門的な知識までは到達していないということなのかもしれない。一層の理解度を高める工夫が必要である。

授業時間以外の勉強時間が多くなるように工夫しているが、一週間当たりの勉強時間が30分未満の学生が3割程度いる。おそらく、高校まで授業時間以外の勉強をほとんど行ってこなかったことが要因と考えられる。勉強する内容を具体的に示すことで少しは改善されると考えられる。せめて、1~2時間と回答する学生の割合が最も多くなるようにしたい。

授業レポートについては、返却するときに復習を兼ねて、かなり丁寧に内容をふり返っている。それをしっかり聞いている学生は、文章のまとめ方がうまくなっている。授業レポートの評価では、非常にうまくかけているものについては、ボーナス点を加点することになっている。その結果なのか、ボーナス点の獲得を目指す学生が数名みられる。ボーナス点を加点するという方法は、成績が優秀な学生の能力を引き出すための一つの手段となりそうである。その一方で、最後まで教科書をただ写している学生もかなり見られる。その場合は、基準点より低い得点となるが、それらの学生は得点より提出することを優先しているようである。

読書課題では、興味をもってしっかり内容を理解している学生もいれば、流し読み程度の学生もいた。指示通りにレポートを作成している学生が多かった。読書が嫌いな学生にとっては面倒な課題であったようだ。新書を選定するのは難しいが、学生が興味をもって読める本を選んで今後も続けていく予定である。

代謝マップ作りでは、非常によくまとまっている学生からほとんど代謝経路のつながりを理解できていない学生と理解度にかかなりの差がみられた。1枚の代謝マップにまとめることで、学生はそれぞれの代謝経路のつながりを理解できるようになったようである。内容だけでなく、見た目の良さも評価の観点に加えたので、代謝経路の配置や色分けなど、工夫して作成している学生が多くみられた。

学生の学修成果の獲得状況をみると、年々上位層と下位層とのさが開いているように感じている。上位層を伸ばす取り組みが成果を挙げているからである。一方、下位層には、ほとんど変化がみられていない。今以上に下位層に対する取組を充実させる必要がある。下位層の学生に組織的に個別の学習支援

を実施する体制を構築する必要があるであろう。

学生からの評価やアンケートは行っていないが、ハイフレックス型授業の方法を確立し、授業で実践した。さまざまな事情で対面では受講できない学生に対して、オンライン配信を行い、学生の学修が遅れることがないように配慮した。欠席者を少なくすることができるので、学生の学修成果の向上に寄与することが期待できる。

5. 今後の目標

- ① 具体例や話題を工夫し学生の理解度を向上させる(基礎をしっかり理解させたい)
 - ✓ 学生が自分の理解度を適切に自己評価できるようにする
 - ✓ ふり返しシートを工夫し、学生が授業を毎回しっかりとふり返られるようにする
 - ✓ 予習して授業に臨むことが当たり前になるようにする
 - ✓ 学生のレポート作成能力を向上させる(しっかりとレポートを添削する)
 - ✓ 学生が研究室で気軽に個別にアドバイスしてもらえ環境を整える
 - ✓ 粘り強く最後までやり抜けるようにする
 - ✓ ハイフレックス型授業を積極的に取り入れ、学生の学修成果の向上をめざす
- ② 初年次教育、MDA 教育、ICT 教育を充実させる
 - ✓ 教員と学生との間の信頼関係を早い時期に築く
 - ✓ 学生の状況を入学後早い段階で把握し適切に対応する
 - ✓ 学科の特性に合わせた MDA 教育カリキュラムを作成する
 - ✓ Microsoft 365 の機能をフル活用した教育を実践する
- ③ 専門課程のガイドブックの作成を試みる(どの段階を学んでいるのか、ゴールは何処かをわからせたい)
 - ✓ 栄養士課程全体の目標を完成させ、それに基づいて各科目の到達目標を設定してもらう
 - ✓ 各科目の授業内容や到達目標を教員どうしで共有し、授業の効果を最大限まで向上させる
 - ✓ 機能的な学修ポートフォリオを考案する
 - ✓ オリエンテーションやガイダンスの資料を充実させる
- ④ 入学前教育を充実させたい(高大接続という観点)
 - ✓ 総合型選抜のミニ講義から総合型船場スクーリングまでの内容を充実させ、入学後の学習につなげる
- ⑤ アセスメントプランに基づいてしっかり評価する
 - ✓ しっかりとしたアセスメントプランに基づいた評価を日常化する
 - ✓ 学修成果・教育成果を測定し、把握する仕組みを構築する
 - ✓ 学生にわかりやすい形で学修成果・教育成果を可視化する
 - ✓ IR 情報の活用を推進する
 - ✓ 情報の公開を促進する

6. その他

昨年度から、学修成果の獲得状況を自己評価させることに取り組んでいる。入学時のオリエンテーションで説明し、1年後期の開始時に自分の成績をふり返ってもらった。自己評価の際には、後期の目標も記載させたので、多少は学習に対する姿勢に変化が見られたのではないかと感じている。

学生は大学の成績評価のSやAなどが評価としてどのようなレベル(状態)のことかを理解していないようなので、到達目標に対する学修成果の達成状況として表現し、わかりやすくしている。それが定着することにより、学生一人ひとりがどのレベルをめざすかという目標を定めるようになって考えている。今年度はディプロマ・サプリメントの様式を作成し、卒業時に発行することができた。

本学における最大の課題は、学生の確保である。学生がいることによって大学における教育活動を実践できるので、入学者を確保しなければならない。18歳人口の減少に加えて、短期大学を希望する高校生も減少している。このような厳しい中で、学生を確保するためには、本学の魅力(強み)をつくらなければならない。時代のニーズをとらえながらも、普遍的な魅力を作り上げていきたい。本学の魅力の一つとして、面倒見のよい短期大学をめざしたい。